



東高だより ーはなみずきー

第5号
(H23.5.13)

「白いカーネーション」

今年も何もせずに終わった。昨年と同じ繰り返しに、自分が成長していない、と感じた。東北の被災地では、亡くなられた多くの人々の冥福を祈るように、桜が満開である。本当なら花見で賑わっているはずなのに、片隅に咲く今年の桜はどこか淋しげだ。鎮魂の桜ではなく、人々の顔を笑顔でほころばせる桜になってほしい。一刻も早い復興が望まれる。

その写真は一人の少女をとらえていた。彼女の手には白いカーネーション。背後にはまだ津波の爪痕が生々しい。「母の日」か。今年は赤ではなく白のカーネーションが多いと書いてあった。

カーネーションを手にした少女の顔を見ているうちに、目頭が熱くなった。彼女の置かれた状況がどうなのか想像するしかないが、赤いカーネーションを持たせてあげたかった。

私が生まれて57回「母の日」があった。私の記憶に残る「母の日」は、小学校の4年か5年のときの母の日である。担任が、「母の日が来ます。みんなお母さんにお礼の手紙を書きましょう」と言って、一人ひとりに白い紙を配ってくれた。私を含め何人かは面食らっていた。母親にお礼の手紙を書く。面食らうというか、母親に手紙、それもお礼の手紙と聞いて、面はゆい気持ちだった。母に感謝はしていたが、手紙を書く、それもお礼の手紙となると、なんだか素直に自分の気持ちを書くことができなかった。私は、脳味噌をぎゅっとしぼり文言をひねり出そうとしたが、うまくいかなかった。友達の何人かは、できあがった手紙を声を出して読む者もいたが、私にはそんなことはどうもできなかった。担任に叱られないような内容をどうにか書き綴って仕上げとした。

ところが、それから数日間というもの、母と面と向かって顔を合わすことができなかった。例の手紙がそろそろ届く頃だ。そう考えるだけで恥ずかしかった。素直さがないというのは、こういうのを言うんだろう、きっと。それから数日して学校に行こうとしたら、母に「学校から手紙が届いたよ」と一言言われた。素っ気ない一言だったが、母も私の気持ちを察してその一言でとどめたのだろう。

母は今年89歳になる。頭が痛い、腰が痛い、痛いところばかりである。それでも野菜をつくらしたり、庭の草取りをしたりと、毎日忙しそうに動いている。ゆっくりしようと思えばできるのに、生来の貧乏性のため、なにかにつけせわしなく動き回る。そうやって動き回っては、腰が痛い、足が痛い、口癖のように繰り返す毎日だから、私も兄も苦笑するばかりである。でもまだ元気なので安心している。健康に勝る宝なし。



それにしても随分と小さくなったものだと思う。母は昔の人間としては結構大柄だった。私も兄も母親の体の大きさを受けついだ。そんな母だが、今は半分くらいに縮んでしまった。以前、「私が大きくなるに反比例して母が小さく縮んでいった。まるで私は母の愛情と元気を吸い取り大きくなっているようだ」と書いたことがある。もしかすると、親子というのはそうなのかもしれない、と母を見るにつけ思うようになった。百姓に生まれ、一生土から逃れられない生活を送る。そんな母の人生は地味でときにはつまらなく映るかもしれないが、私にとっては人生の鏡である。なにせ母がいなければ現在の私は存在しえないからだ。野良仕事に明け暮れる母の姿が脳裏にあるから、私はいたずらに自分を浪費してはならないと、ときどき自身を戒めることができる。

そんな母親に今年も何もせずに終わった。小学校のときに例の手紙を書いて以来ずっと何もしていない。親不孝だろうか？ 世間一般の考えからすればきっとそうなんだろう。母も高齢だ。「ありがとう」の一言を言えずに終わっては、これこそ親不孝というものである。今年こそは、と思いながら、仕事に追われやっぱりその機会を逸してしまった。

朝の散歩道の途中に古い地蔵がある。地蔵の顔は摩滅し汚れてほとんどないに等しい。その地蔵に毎朝、家族の無事を祈ることを日課としている。私ができるささやかな親孝行だと考えている。

空高く雲雀が賑やかに舞う。未曾有の地震と津波があったとは思えないほど穏やかで長閑だ。しかし、白いカーネーションを持ったあの少女は、果たしてうまく自分の気持ちを伝えられただろうか。それとも、もし愛する母親を亡くしていたら……と考えるだけで、また目頭が熱くなる。



